



鈴木貢会長

今年の「新春のつどい」は、令和6年1月13日(土)に「そば割烹日晃」にて、会員60名の参加で開催いたしました。日中は温かい日差しでしたが、開会時刻が近づくとともに強く雪が降り出し心配しました。しかし、しばらくして雪も止み、閉会のときには雪も積もらず穏やかな天気となりました。「新春のつどい」の主催者挨拶として、鈴木貢会長

が本年度の事業を計画どおりに実行し、前年度を上回る参加者や入場者があったことを報告。その後、佐藤信市長、谷中恵子議長、湯澤英之県議、片柳伸一市商工会議所会頭(代理)各位から、新年を祝うお言葉と当協会の活動に対し賞賛をいただきました。

続いて、来賓の松井正一県議、福田義一副市長、中村仁教育長、佐藤誠市議、増渕靖弘市議、鹿妻武洋市議、仲田知史市議、早川勝弘市議、船生雅秀市議、阿部秀実市議、西山義信参与、岩本久美子参与の皆様を紹介しました。

西山義信参与の乾杯の発声で祝宴が始まり、会員の皆様は、温かく美味しい料理を満喫しながら、親交を



つくろう 伸ばそう 鹿沼の文化

かぬま文化

No.177

発行人 鹿沼市文化協会
発行責任者 会長 鈴木 貢
編集委員会 委員長 黒川 榮三
印刷所 晃南印刷(株)



日晃本館会場 乾杯の発声

深め合いました。

「つどい」では、令和5年度の栃木県芸術祭川柳部門の文芸賞を受賞された福田英子様を招き、「かぬま川柳会」の松本とまと会長より花束を贈呈しました。同じく随筆部門の文芸賞を受賞した荻屋紀子様については、都合がつかず欠席されましたが、作品をご披露したいとのご希望があり、会場に掲示をして皆様にご覧いただきました。

今回は初めて、神永陽韻師による新春を祝うお琴



文芸賞受賞 福田英子氏(右) かぬま川柳会会長 松本とまと氏

(事務局 福田 由子)

で、皆様をお迎えいたしました。アトラクションの「鹿沼三曲会」による琴と尺八の演奏は、厳かで美しい音色が新春の喜びを表していました。また、「鹿沼民謡民舞連合会」の皆様による、会場に響き渡る元気な歌声で、祝宴を盛り上げていただき、年始にふさわしい活気となりました。



ウェルカム琴演奏

元日には、能登半島地震が発生し、多難な幕開けの年となりました。

さて、昨年は、文化協会の全ての事業を実施することができました。鹿沼市民文化祭は、参加者と入場者数の合計は、5,875名となり、前年の2.6%の増加となりました。

また、栃木県芸術祭の川柳部門「風」を詠み文芸賞を受賞されました、福田英子様おめでとうございます。

「かぬま川柳会」会員の前年度受賞者白石様に続き、今年も会員の福田様を受賞されました。さらに、98歳の小野口博様が、題名「生きる」で同じく川柳部門準文芸賞を受賞されました。

「かぬま川柳会」の役員の皆さまは、コロナ禍や高齢化などの課題を乗り越え全力をあげて、「いちごいちえ鹿沼川柳大会」「川柳勉強会」などの開催を推進してきました。このような日ご

新年あいさつ

ろからの活動の積み上げが受賞につながりました。

また、随筆部門 題名「サプライズ」で、文芸賞を受賞されました荻屋紀子様おめでとうございます。

平和、自然災害、生活に対する不安や困難な状況が続いております。今こそ芸術や文化活動を通して、視野を広げ、歴史観を見つめなおすことが求められています。

今年こそ「新たな挑戦が吉となり、辰のごとく舞い上がる」ことを心から祈念致します。

鹿沼市文化協会
会長 鈴木 貢



目次	
令和6年新春のつどい	1
新年あいさつ	1
鹿沼史談会	2
鹿沼鈴懸短歌会	2
かぬま川柳会	3
随筆に親しむ会	3
栃木県文化振興大会	4
編集後記	4

鹿沼市文化協会編集委員長を

退くにあたつて

鹿沼史談会 黒川 榮三

国際ペンクラブをご存知ですか。世界各国の詩人、劇作家、評論家、小説家など文章従事者が友好と親睦を通じて国際間の理解を深めようと結成した組織で、第一次世界大戦後に設立されました。国際ペン会館がパリにあつて、日本ペンクラブはその支部です。文化協会編集者(Editor)も、当然含まれます。機関誌作りの扇のなまめ的な存在と表現したら過ぎるでしょうか。編集委員長を仰せつ



黒川榮三編集委員長(ご夫婦で文化センターにて)

かった当初、筆者は長年勤めた地方新聞の記者体験を踏まえ、記事の要素や表現方法を提示しました。再録すると、いつ、どこで、だが、なにを、なぜ、どのように書くかのいわゆる「5W1H」についての提案です。駆け出し時代、「文章は逆三角形で、言いたい内容から先に書け」と指導されたものです。新人教育で徹底的に絞られたので忘れられません。基本というか、初心者向けの文章術の大切さを指摘したつもりでしたが、ベテラン会員の書き手には配慮を欠く例示だったかもしれません。文章の書き方や仕立て方は、内容次第ですよ。

会員から

は「執筆者の顔が見えない」とか「個性をもっと出すべきだ」という意見もあつたようです。同時に会議では、平易な文章に心掛けるよう要請した事例もありました。その方が書き手の思いや情報の中身が読者に迅速に、しかも正確に伝わり、話題にしやすいと信じたからです。誌面が仲間との交流の場づくりに役立つと思ったのも確かで、今もそう願っています。

最近、記者の先達で評論家の長谷川如是閑(二八七五—一九六九)の『全集』(8巻・岩波書店、同店には別に『如是閑文藝選集』4巻あり)を読み返しています。「書く」作業を担うという意味では、全ての会員に関わりますので、参考までに少々触れます。

端的に言えば「いい文章」なんです。この一言に尽きます。例えば日本人と西洋人の所作や身体の動きの違いを克明に連ねた小品「上から下へ」「真実

はかく伴る」所収)はとにかく平明で、遊び心さえ感じます。かつ具体的で、均衡さにも気遣う。また「臆は語る」に収められた「クツミがき」という随筆では、戦後の靴磨き風景が描写され、日本人の心の原風景だけでなく、作者の思いや心の変化、流れなどを垣間見るように、感動を覚えるのは私だけだろうか。

難しい内容でも品格を兼ねそろえた文章にしつらえてしまう。手品師みたいな御仁だが、こんな文章に出合うと、「ほっとした」心境になつてくるから不思議です。筆者は一介の物書きに過ぎませんが、個人的には目標にしたい大先輩の一人です。県立図書館に全巻揃っているとの情報を得ましたし、市立図書館も協力を厭わないようですので、貸し出しも可能でしょう。多くの人に一読を勧めます。

受け、もう一足の草鞋を脱ぐ時期が来たようです。「晴耕雨読」の日常を選択する決断を致しました。編集委員、執筆者各位には機関誌づくりの責務に一緒に取り組んでいただき、心から感謝申し上げます。少子高齢化という難しい時代を迎えます。会員組織、運営方法など山積する課題は多く、決して避けて通れません。皆さんの今後のご活躍を祈念しております。ありがとうございました。

最後に個人的な話です。新型コロナウイルス禍の規制緩和に伴い、昨年9月24日鹿沼

上粕尾妙見神社に

「篠 弘」の歌碑を訪ねて

鹿沼鈴懸短歌会 津吹 節子

わが「鈴懸短歌会」は2023年11月にて例会の「七七七回」を迎えた。これを記念して、上粕尾の妙見神社に「篠 弘氏」の歌碑が建立されたと聞き訪ねることにした。

この歌碑は、令和改

史談会主催の史跡見学会「古代のしもつけを知ろう」に参加しました。県埋蔵文化財センター(下野市)を中心に国分僧寺跡、国分尼寺跡、琵琶塚古墳などを見学、研修しました。秋晴れの下、参加者らは古代や中世の古里に思いを馳せました。日本史の中でも比較的分らない部分が多いとされる中世史だけに、筆者には興味深い視察内容となりました。

※付記、なお記事中、生年月日の表記は鹿沼史談会の機関誌『鹿沼史林』を参照した。

元に際して、挙行された大嘗祭で新穀を献上する悠紀国地方に栃木県が選ばれたため建立されたものだ。歌会始の選者「篠 弘氏」が栃木県の風俗歌九首を詠進され、その一つに妙見神社の強飯式の歌

があり歌碑となった。
○大食ひを妙見神社に
きそはむと山伏つど
ふその面構へ
今は寂れた山村の誇
りと機縁として妙見神
社の氏子の人たちが
2021年に建立され
たと聞く。この事を私
たちは後に聞くことにな
った。かの猛暑を一
気に飛び越え急に寒さ
が浸みてきた11月11日
に会員9名はマイクロ
バスにて未踏の地、上
粕尾妙見神社へ向かっ
た。昨日の雨も上が
り、平らかな妙見神社
の境内の一角に白御影
石の大きな歌碑は建っ
ていた。これにも氏
子の人達の
思い入れが
深く感じら
れた。会員
のみなさん
はあ然と見
上げるばか
りであった。
彼の強飯式
を彷彿させ
る石の大き
さ、形に圧
倒されるば
かりであっ
た。その歌



上粕尾妙見神社にて

碑が建った上の小高い
ところにだいたい風化し
た妙見神社の祠があ
る。今は、発光路公民
館で強飯式が行われて
いるようだ。もう来る
事のないこの妙見神
社：いや：来られな
い。この地とも別れの
時、妙見神社の空に大
きな鶯が数羽「ようこ
そ」と言わんばかりに
舞っていた。
○師の教え万葉のここ
ろ繋ぎ来て鈴懸会は
や777回
津吹 節子
○鶯の舞う妙見神社の
歌碑の前777回歌
会の仲間は拝す
松本 静子

文芸部門フェスティバル、

お疲れ様でした

かめま川柳会 会長 松本 とまと

昨年7月8日・9
日、鹿沼市文化協会文
芸フェスティバル「一
枚の紙と一本の鉛筆か
ら」を開催した。野口
雨情写真展と鹿沼の歴
史ミニ講演を同時に開
催し、文化センターの
ギャラリイは賑やかな
週末となった。

随筆・短歌・俳句・

川柳・歴史部会が会員
の日ごろの作品を展示
したり、川柳クイズ
コーナーを作っ
て、来場者に会の
活動をアピールし
た。

また、随筆・短
歌・川柳部会が、
やさしい作品の
書き方や体験教
室のブースを設
け、多くの来場者
が体験し「作品を
作る時の勉強に
なった」と喜んで
もらえた。

この度の催しは、
取りも直さず、会
員を増やしてい



文芸フェスティバル会場(多目的ギャラリー)

一心である。このとこ
ろ、全国的に文芸系の
趣味の会も高齢化が進
み、会員の減少に歯止
めがかからない現実が
ある。そんな時、他市
に例を見ない「文芸
フェスティバル」を開
催するということで、
川柳マガジンの7月号
では全国版に掲載され
た。

このために各会と

も、真剣に企画
と準備を進め、
皆が協力して実
現させた。同時
に仲間意識が高
まった気がし
て、それも嬉し
いおまけだと思
える。



川柳クイズ

書く楽しさを探して

随筆に親しむ会 事務局長 押久保 千鶴子

私達「随筆に親しむ
会」は、それまで母体
であった「随筆文化推
進協会」から離れて、
大野比呂志氏を会長に

2022年6月に発足
しました。
現在会員は、旧会員
を中心に19名で県外か
らの参加者も6名いま
す。(この方
達は作品のみ
の参加となり
ます)

主な活動と
しては、同人
誌「ずいひつの杜」
(年1回発行)と文学散歩
です。すでに
行済みです。

発行するに
あたり、勉強
会を毎月1回
開いています。



随筆に親しむ会



随筆に親しむ会



栃木県文化振興大会(真岡市)にて

第47回栃木県文化振興大会が令和6年1月20日(土)に「KOBELCO 真岡いちごホール(真岡市民会館)」で開催された。

第47回栃木県文化振興大会報告 日本の伝統芸能に魅了される

文化活動を通して地域との交流を深めることを目的とし、かぬま文化協会から14名が参加をした。ホール前のホワイエでは、「芳賀地方芸術祭作品」として書、写真、絵画と各流派の代表による生け花が展示され、見応えのある力強い作品が多くあった。

式典後に特別演奏として、文化奨励賞を受賞した五月女凱昂氏による吟詠剣詩舞「本能寺」外2演目が披露された。五月女凱昂氏は、津軽三味線や和太鼓とのコラボレーションをし、Eテレの番組に出演するなど、全国で活躍されている。



アトラクション「尊徳太鼓保存会」

34才の若い感性が伝統芸能の舞と相まって、エンターテインメント的な舞を感じられる舞台だった。

アトラクションのひとつ「尊徳太鼓保存会」は、二宮尊徳氏の「報徳仕法」を和太鼓の響きにのせて全国に発信する目的に組織された。和太鼓演奏はとても迫力があり、太鼓の鼓動が身体に響き、踊り出したくなるようなパフォーマンスだった。

各自作品を持ち寄り、文章の内容や表現方法などの確認を行っています。より良い作品に仕上げるためには、大切な時間でもあります。随筆は「自分だけの小さな物語」といわれていますように、自分の体験や思いをいかに読者に伝わるように書くかが大切です。原稿用紙5枚程度のものでありながら、毎回四苦八苦することもあります。

福田富一栃木県知事と中津正修栃木県文化協会会長が主催者あいさつをし、続いて令和5年度文化奨励賞五月女凱昂氏に対する表彰が行われた。



文化奨励賞受賞者 五月女凱昂氏

今回は、他市の芸術に触れ、より一層、文化活動の重要性を認識した一日だった。令和6年度は栃木市で開催する。また、素晴らしい芸術を鑑賞できる機会となると思う。

新しい年を迎え、自粛していた新年会も盛大に行うことができました。

今回は文芸部門の方の協力で177号が発刊できました。文芸部門の方は県で多くの入賞者を出され、市ではコンクールを主催し表彰式を行うなど、活発に活動しておられます。

編集後記

さて、今年は辰年です。龍は神話では神聖な存在で力や知恵・権威の象徴とされ、水の恵みをもたらす存在として自然と共生する国日本では重要視されてきました。このように勇壮な龍は、私達に活力を与えると同時に知恵や希望をもたらします。

鹿沼市文化協会も龍のように力強く、活発に活動し、発展していくように願っています。最後に、能登半島地震で被災された方々にお見舞い申し上げます。全ての人が平和に暮らせるように願っています。

(編集委員 大貫 宗正)



《編集委員会》

黒川 榮三
板橋 和子
寺崎 昌子
小藤 夏江
斎藤 千恵子
大貫 宗正